

善無畏訳経軌における五字嚴身観について

小 崎 良 行

抄録

本稿は「伝善無畏訳」と称され、日本へ将来された経軌に注目した。これらの多くに説かれる観法に五字嚴身観がある。五字嚴身観は『大日経』に説かれる観法であるが、『大日経』由来の「伝善無畏訳」経軌において、独自の展開を遂げた記事が見られる。

本稿はこのような展開のうち、『大日経』から『大日経』「供養法」、『大日経』「供養法」から『撰大儀軌』・『廣大儀軌』の記事の考察を行う。これにより、漢訳経軌成立事情の一端を明らかにすることを目的とする。

一、はじめに

善無畏（六三七～七三五）は開元四（七一一）年に、長安に入り、開元二三（七三五）年に入寂するまでの在唐二〇年間のうちに、『虚空藏求聞持法』一卷（『大正蔵』一一四五番）・『大日経』七卷・『蘇悉地経』三卷（『大正蔵』八九三番）・『蘇婆呼童子経』三卷（『大正蔵』八九五番）の翻訳を行っている。なお、『開元録』や『貞元録』といった中国の経録に入蔵しているのもこれら四部一四卷である。

先行研究によれば、善無畏の訳出及びその撰述に係るものは、この他、二十一部三十一卷あるとされ、日本に将来されている。しかし、日本への将来が記録されているそのほとんどは、中国の記録において見出すことが出来ない^④。よってそういった「将来録のみに記録されている経軌」は、「伝善無畏訳」として日本に将来され、現存していると言えよう。

さて、先述したように、善無畏は『大日經』の翻訳を行っており、さらにはその注釈書である『大日經疏』を残した。『大日經』由来の胎藏法において、重要な行法の一つに五字嚴身觀があげられる。この觀法に関連する記事は『大日經』はもちろんのこと、先述したようないわゆる「伝善無畏訳」の經軌に多く記されている。

○善無畏訳あるいは伝善無畏訳の五字嚴身觀に関連する記事を記す經軌

・『大日經』前六卷

・『大日經』「供養法」「持誦法則品」

【『大日經』前六卷の注釈書】

・『大日經疏』（『大正藏』一七九六番、具名『大毘盧遮那成仏經疏』）

※なお、『大日經疏』は善無畏口説、一行（六八三〜七二七）記である。

【『大日經』「供養法」の類本】

・『要略念誦經』⁵（『大正藏』八四九番、具名『大毘盧遮那仏説要略念誦經』）

【『大日經』「供養法」の注釈書】

・『不思議疏』（『大正藏』八五〇番、具名『大毘盧遮那經供養次第法疏』）

※なお、『要略念誦經』は菩提金剛訳とされ、⁶『不思議疏』は不可思議撰であり、⁷善無畏訳あるいは伝善無畏に係る撰述で

はない。

【胎藏四部儀軌の内の二本】

・『撰大儀軌』（『大正蔵』八五〇番、具名『撰大毘盧遮那成仏神變加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便会』）

・『廣大儀軌』（『大正蔵』八五一番、具名『大毘盧遮那經廣大儀軌』）

【その他】

・『尊勝儀軌』（『大正蔵』九七三番、具名『尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀』）

・『慈氏儀軌』（『大正蔵』一一四一番、具名『慈氏菩薩略修愈譏念誦法』）

※『廣大儀軌』と『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』所説の五字嚴身觀を中心とする行法が密接に関係していることは既に報告しているため⁸⁾、本稿では『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』には特に触れない。

※これらの他にも五字嚴身觀の展開された記事の見られる經軌に「三種悉地破地獄儀軌」と称される儀軌が三本あるが、これら三本所説の五字の儀礼は、本稿で取り扱う五字嚴身觀を中心とする行法よりもより展開された記事を持つ。今回は紙数の関係上取り扱わないが、別の機会に述べたい。

以上、本稿ではまず、「『大日経』前六卷に記される、五字嚴身觀の構成要素」を確認する。次に、その構成要素に基づいて構築された『大日経』『供養法』『持誦法則品』（以下、「持誦法則品」）所説の五字嚴身觀の記事を見ていくが、

合わせて、五字嚴身觀と共に説かれる行法も見ていきたい。これは「持誦法則品」において、五字嚴身觀が独立した行法ではなく、五字嚴身觀を中心としていくつかの行法が組み合わさった一連の行法となっているためである。

次に『撰大儀軌』と『廣大儀軌』の記事を見ていくが、これらのうち『廣大儀軌』にのみ、五字嚴身觀を中心とする一連の行法の記事が見られるため、『撰大儀軌』は参照程度にとどめたい。この一連の行法の考察により、善無畏訳とされる経軌の成立事情の一端を明らかにしたい。

この考察の前提として、まずは『撰大儀軌』・『廣大儀軌』の成立について確認したい。

二、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』の成立について

『撰大儀軌』・『廣大儀軌』は、『大日経』の漢訳、『大日経』「供養法」の成立以降に中国において成立したものと考えられる。これらは善無畏訳と伝えられながらも、経録に入蔵してはいないばかりか、その存在を記録している資料のほとんどは、日本への将来の記録である。そこでまずは、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』の成立事情に関する資料を見ていきたい。

『撰大儀軌』・『廣大儀軌』は「胎藏四部儀軌」と称される胎藏系を代表する儀軌である。「胎藏四部儀軌」は次の四つの儀軌を指す。

〈「胎藏四部儀軌」

・『撰大儀軌』

・『廣大儀軌』

・『玄法寺儀軌』（『大正蔵』八五二番、具名『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会』）

・『青龍寺儀軌』（『大正蔵』八五三番、具名『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幟普通眞言蔵広大成就瑜伽』）

「胎藏四部儀軌」のうち、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』が善無畏訳と伝えられ、『玄法寺儀軌』・『青龍寺儀軌』が法全（？八四二～八五五？）集、あるいは法全撰とされている。^⑪

なお、「胎藏四部儀軌」のうち、『玄法寺儀軌』・『青龍寺儀軌』所説の五字般若身観の記事を比較すると、同一であることが確認できる。^⑫ 両儀軌所説の五字般若身観の記事は『大日経』「持誦法則品」からの引用である。なお、両軌は法全集のため、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』、よりも後の成立であると考えられる。よって、本稿では以降、『玄法寺儀軌』・『青龍寺儀軌』に関しては特に触れない。

『撰大儀軌』・『廣大儀軌』は『大日経』同様、善無畏訳と伝えられているが、内容を鑑みれば、『大日経』「供養法」を展開した内容を有するため、『大日経』「供養法」以降の成立と考えて相違ない。

善無畏訳と伝えられる『撰大儀軌』・『廣大儀軌』であるが、両軌は中国の経録に記録が無い。そこでまず、日本への将来を確認したい。

○『撰大儀軌』の将来

・宗叡『録外経等目錄』（『大正蔵』五五、二一七五番）

撰大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅广大念誦軌一部三卷（輪波迦羅三蔵訳、三十三張）^⑬

・安然『八家秘録』（『大正蔵』五五、二一七六番）

撰大毘盧遮那成仏神変加持経入蓮花胎藏海会悲生曼荼羅广大念誦儀軌三卷（無畏訳、一行筆受、宝月訳語、仁根本）^⑭

○『廣大儀軌』の将来

・宗叡『録外経等目錄』（『大正蔵』五五、二一七五番）

大毘盧遮那經廣大儀軌一卷（亦名大悲胎藏善無畏三藏本法潤阿闍梨伝者）四十五張。策子¹⁵
・安然『八家秘録』、『大正藏』五五、二一七六番

大毘盧遮那經廣大儀軌三卷（無畏、観、法潤付二惟謹一本）¹⁶

このように、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』は空海・最澄の将来ではなく、宗叡による将来である。宗叡は貞観四（八六二）年～七（八六五）年の間、唐に渡っているため、両軌の日本への将来は、比較的に遅い時期であると言える。このように将来者の問題から、善無畏訳あるいは善無畏述の可能性に一応の疑問がある。

なお、『胎藏圖像』・『胎藏旧図様』・『五部心観』など、善無畏に関わる古い図像資料を円珍（入唐、仁寿三（八五三）年～天安二（八五八）年）が将来していることから、両軌の将来が遅いからと言って、ただちに善無畏の手によることを否定することもできない。この問題を解消するには『撰大儀軌』・『廣大儀軌』の記事を詳細に考察する必要がある。しかし、『撰大儀軌』は『大日経』前六巻の記述を再整理させた形として、そして『廣大儀軌』は『大日経』「供養法」を踏まえ、『大日経』前六巻の教理を解釈した上で、『大日経』「供養法」をさらに展開させた形が見られる。よって両軌は、善無畏以降の者の手によって成立した可能性があることを指摘しておきたい。

三、諸経軌所説の五字厳身観について

ここからは、諸経軌所説の五字厳身観の記事をそれぞれみていく。そこでまずはその前提として、『大日経』所説の五字厳身観の記事を見ていきたい。なお、『大日経』所説の五字厳身観については、既にいくつも詳細な研究が報告されている¹⁸。よって、『大日経』前六巻所説の記事については概要のみ確認する。また、『大日経』「供養法」の記事に関しては、その類本であるとされている『要略念誦経』と『大日経』「供養法」の注釈書である『不思議疏』の記事も参照していきたい。

●『大日経』前六巻に記される、五字嚴身観の構成要素

ここでは、『大日経』前六巻諸品に見られる、五字嚴身観の裏付となる教理を確認していききたい。

○「具縁品」

五字が何を象徴するものなのか、五字の字義が記されている。⁽¹⁹⁾

○「秘密漫荼羅品」

大金剛輪（地輪）、水輪、火輪、風輪の四輪を身体に配当する布置観が説かれている。⁽²⁰⁾ なお、『大日経疏』の該当する文には地輪と空輪への配当も見られる。⁽²¹⁾

○「阿闍梨真実智品」

「阿字は第一命なり。嚩字を名づけて水と為し、囉字を名づけて火と為し、𑖀字を忿怒と名づく、𑖐字は虚空に同じ。所謂極空の点なり。此の最真実を知るを説いて阿闍梨と名づく。」⁽²²⁾ と、最真実を知るものを阿闍梨としている。

○「悉地出現品」

𑖐字を「大金剛地際」として「下身」を加持し、さらに「大因陀羅輪」として地輪へ配当する。また、「金色光明の身を作せ」と、地輪を「金色」としている。va字門の色として「雪と乳と商佉」つまりは白色とし、さらに「輪円九重」つまりは円とし、それらを「臍の中」に配当する。𑖐字を「火」とし「彤赤」とし、その三角形の火輪を「心」に在く。ha字を「風輪」「深青の半月輪」として「眉間」に観じる。kha字を「尊勝にして虚空の空なり」としている。⁽²³⁾

●『大日経』「供養法」「持誦法則品」と『要略念誦経』所説の五字嚴身観

これまでは、『大日経』前六巻諸品にみられる五字嚴身観の構成要素たる記事を確認してきたが、行法として整備さ

れているとは言い難い。五字厳身観として整備された記事は「持誦法則品」において見られる。

よってここからは、「持誦法則品」の記事を見ていきたい。それに伴い、『大日経』『供養法』の類本とされる、『要略念誦経』の記事も適宜参照したい。これは、『要略念誦経』が『大日経』『供養法』よりも整備した記事を有するのみならず、『大日経』『供養法』では偈頌となつてゐる記事を長行によつて記しているためである。²³⁾ すなわち、『大日経』『供養法』の記事を読み解く際、『要略念誦経』を参照することは、内容理解の一助となるであろう。さらに、『大日経』『供養法』の注釈書である不可思議撰の『不思議疏』²⁴⁾の解釈も参考にしつつ、その内容を見ていきたい。

○「持誦法則品」

五字厳身観は「持誦法則品」において、特に細かく区分けがなされておらず、どの記事が五字厳身観の儀礼内容を指しているのか、読み解きにくい。

これに対して『要略念誦経』及び『不思議疏』²⁵⁾においては細かく区分けがなされており、それぞれ『要略念誦経』では「毘盧遮那心地法」²⁶⁾

『不思議疏』では「大日三密速得門」²⁷⁾

と称される一連の行法において修される。この一連の行法を概略すると、次のように分けることが出来る。

- (一) 大日如来種子心真言及び印
- (二) 如来毫相真言及び印
- (三) 五字厳身観
- (四) an 字・ran 字の布字

よってここでは「持誦法則品」の五字嚴身観の記事を考察するに辺り、この一連の行法をそれぞれ見ていきたい。これにより、「持誦法則品」における五字嚴身観を修す理由が明らかになるといえよう。

(一) 大日如来種子心真言及び印

復た樂つて如来の三密門を修習し、一月を経る者の為に、次に彼の方便を説く。行者、若し大毘盧遮那の正覺の真言と印とを持誦せば、当に是くの如きの法に依るべし。大日如来の種子心に曰く「南麼三曼多勃駄喃 阿」阿字門は、所謂一切法本不生の故なり。已に前に説くが如し。⁽²⁸⁾

ここでは、大日如来種子心真言として「南麼三曼多勃駄喃 阿 (namah samanta buddhānāṃ a)」を唱えることが記されている。この修法が具体的に如何なる修法なのか定かではないが、対応する『要略念誦經』の記事を見ると、

復た次に、智者、毘盧遮那心地の法を持せんと樂う者は、先ず自心において、一の阿(上)字を置け。当に思惟を起こすべし。諸法は本より無生無滅なり。(前に已に説くが如し。)置字の明に曰く「南麼三曼多勃駄難 阿」この字より、如来の身を転起す。これを身密門と名づくなり。⁽²⁹⁾

とあり、自身の心に阿字を布置し、それにより大日如来を転起するためにこの印、真言を修すことが読み取れる。

(二) 如来毫相真言及び印

是の中の身密印は、正覺の白毫相なり。慧の手を金剛拳にして、眉間に在け。如来毫相の真言に曰く「南麼三曼多勃駄喃 阿(去聲急呼) 痕若(呼急)」前の如くに阿字を転じて大日尊と成せ。法力に持せらるるが故に、自身と異なることなし。⁽³⁰⁾

ここでは、如来毫相真言として「南麼三曼多勃駄喃 阿(去聲急呼) 痕若(呼急) (namah samanta buddhānāṃ aḥ hām jah)」を唱えることが記されている。印を眉間に置き、真言を唱えれば、大日如来と等しくなるとしている。対応する『要

略念誦經』の記事は

復た、眉間に於て身の密印を以て白毫相に置け。毫相の印は、右の手拳に為して、急く大指を握り、挙げて眉間に置け。この明を誦じて曰く「娜麼三曼多勃駄難、映哈闍」この明印を以て眉間に加うれば、即ち如来に同じて、等しくして異なること無し。³¹⁾

となっており、真言の音写漢字が「映哈闍」とあるが、「持誦法則品」の記事と同様にこれは「an hām jah」の音写語であらう。次に(三)五字嚴身觀の記事を見ていきたい。

(三)五字嚴身觀

本尊の瑜伽に住して、加うるに五支の字を以てす。下体と及び臍の上と、心と頂と眉間となり、三摩呬多に於て運送して安立すべし。この法に依りて住するを以て、即ち牟尼尊に同じ。阿字は遍く金色なり。用いて金剛輪と作して、下体を加持す。説いて瑜伽座と名づく。鑲字は素月の光にして、霧聚の中に在り。自らの臍の上を加持す。これを大悲水と名づく。嚩字は初日の暉にして彤赤にして三角に在り。本心の位を加持す。これを智火光と名づく。唵字は劫災の焰の如く、黒色にして風輪に在り。白毫際を加持す。説いて自在力と名づく。佉字及び空点は一切の色を相成し、加持して頂の上に在く。故に名づけて大空と為す。(この五種の真言心は、第二品の中に已に説けり。又この五偈は伝度の者、頗る經意を以て足して文句をして周備せしむるなり。)五字を以て身を嚴れば、威徳具に成就す。熾然大恵の炬、衆もろの罪業を滅除す。天魔の軍衆等、及び余の障りを為す者、当に是の如くの人を見て、赫奕たること金剛と同じくするべし。³²⁾

ここでは、五字の身体の五処、五色、五輪への配当が見られる。先述したように、『大日經』前六卷において、その裏付けとなる教理が説かれていた五字嚴身觀が、この記事において整備されている。しかし、この記事では「この五種の真言心は、第二品の中に已に説けり」と、真言をすべて省略している。この記事では、実際に修法する際に不明瞭な

点が多く。実践向きではない。この問題に対して、『要略念誦経』の対応する記事を見ると

便ち五字を以て身分を加持して、想いて五所に置け。謂く身と及び臍と心と頂と眉間となり。是の法に依つて住すれば、即ち世尊に同ず。

初め身下に於て、想いて阿字を置け。その形正方にして黄金色の如し。置字の明に曰く「娜麼三曼多勃駄難 阿」これを摩系達羅字と名づく。この字より転じて金剛輪と成る。即ち如来の座なり。

次に鑊字を想いて自らの臍輪に置け。霧、月の白色の光を含みて凝燿あるが如し。摩訶皤路拏大悲光と名づくなり。置字の明に曰く「娜麼三曼多勃駄難 鑊」

次に、覽字を想いて自心に置け。その字の光色猶おし暉日の如し。智恵光と名づく。心より転じて而も所知障を破す。置字の明に曰く「娜麼三曼多勃駄難 覽」(初めの曷の声に似たり)

次に、唵字を想いて髮際に加えよ。その光、黒色にして、劫災の焰起こつて大威勇有るが如し。自在力と名づく。置字の明に曰く「娜麼三曼多勃駄難 唵」(即ち所観の字なり。)

次に依(法声を帶す。)字を想いて頂上に安んじ、加うるに空点を以てせよ。一切の色雜宝の光明を起こして、一切所に遍ず。大空智と名づく。置字の明に曰く「娜麼三曼多勃駄難 依」

この五字を以て勝身に布すれば、大威徳智恵の光明を具して、永く衆難及び三惡業無し。一切の魔軍自然に降伏し、難調の鬼神も能く障を為すこと無し。唯だ赫奕たる金剛の身を見る。³³

とあり、五種の真言を記載し修法しやすく、また理解しやすような記述となっている。先述したように、『要略念誦経』は『大日経』『供養法』よりも整備された記事を有するが、この記事はその一つの証拠であると言えよう。

(四) an 字・ran 字の布字

また首の中に於て、百光遍照王を置くべし。無垢眼を安立して、猶おし灯明の顕照するがごとし。前の如く瑜伽に

住して、加持することまたはくの如し。智者自体を觀すること、如来の身に等同にして、心月円明の処に、声鬘与にも相応し、字字間斷すること無くして、猶おし韻の鈴鐸の如くせよ。正等覺の真言、取に随つて而も受持す。当にこの方便を以て、速やかに悉地を成ずることを得べし。⁽³⁴⁾

ここでは、「百光遍照王」を置き、「無垢眼」を安立することが説かれているが、これらが具体的に何のことなのか、この記事では全くの不明である。『要略念誦經』の対応する記事には

また、身の中において、阿（上、暗字の声を帶す。）字を置くと思え。その両眼において想いて嚩字を置け。前の如く相応して当に自身即ち如来身なりと觀すべし。無垢眼を以て心月を照らし、相応の字句、若しは誦じ、若しは思つて間斷せしむることなかれ。声は鈴鐸の如く、智は映鏡の如し。若し仏菩薩所説の明印樂いに随つて受持すれば、速やかに成就することを得る。⁽³⁵⁾

とあり、「百光遍照王」が am 字、「無垢眼」が ran 字であるとされている。『不思議疏』でもこの件に関して百光遍照王とは、点有り、阿字なり。無垢とは、覽字なり。⁽³⁶⁾

と解釈しており、このことから「百光遍照王」が am 字、「無垢眼」ran 字と考えてよからう。⁽³⁷⁾

以上、「持誦法則品」と『要略念誦經』に説かれる五字嚴身觀の記事を見てきたが、言い回しは異なるものの、大筋は同一である。あえて大きな相違点をあげるとするならば、「*娜麼三曼多勃駄難 阿 (namah samanta buddhanam a)*」を始めとする五種の真言が五字を布置するための真言が、『要略念誦經』にはみられることである。さらに言えば、帰命する五字が「持誦法則品」は a va ra ha kha なのに対し、『要略念誦經』は a vaṃ raṃ haṃ khaṃ と、空点を加えた形式になっている。⁽³⁸⁾これは、『要略念誦經』が『大日經』供養法よりも、整備された記事を有しているためであると言える。⁽³⁸⁾

●『撰大儀軌』・『廣大儀軌』所説の五字嚴身観

ここでは、『撰大儀軌』・『廣大儀軌』における五字嚴身観の行法の記事を見ていきたい。これらは、『大日経』供養法の影響下において成立したと考えられる。よって、これらにおける五字嚴身観の記事を見ていくことにより、中国密教史上における五字嚴身観の展開過程の第一段階を明らかにすることができると考える。

なお、五字嚴身観の『大日経』から「胎藏四部儀軌」への展開過程は、川崎一洗（一洋）氏が詳細に論じており、また『廣大儀軌』の五字嚴身観の記事が『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』へと引き継がれていることは既に報告している⁽⁴⁰⁾。よってここではそれらに基づいて概略のみ述べたい。

○『撰大儀軌』

まず『撰大儀軌』の記述であるが、先述した『大日経』「持誦法則品」からの依用による、行法として整った五字嚴身観の記述はみられない。ただ第三卷に、先述した『大日経』前六卷に説かれる五字嚴身観の構成要素である「具緣品」・「秘密漫荼羅品」⁽⁴²⁾・「悉地出現品」⁽⁴³⁾・「阿闍梨真実智品」⁽⁴⁴⁾各品からの引用文はみられる。なお、「秘密漫荼羅品」の偈頌を用いている記事の直前に、満足句の真言「*namah samantabuddhānāṃ a vi ra hūṃ kham*」を唱える点が『撰大儀軌』の記事において特徴的である⁽⁴⁵⁾。

○『廣大儀軌』

次に『廣大儀軌』の記述である。『廣大儀軌』に見られる五字嚴身観が『大日経』「持誦法則品」のものによって作成されたことは明らかである。また、『廣大儀軌』所説の五字嚴身観の記事は、「持誦法則品」の五字嚴身観を説く部分に『大日経』「悉地出現品」の五字の布置に関する記事を加味してやや増広された形で引用されているものである。

先述したように、「持誦法則品」の五字嚴身觀は

(一) 大日如来種子心真言及び印

(二) 如来毫相真言及び印

(三) 五字嚴身觀

(四) am 字・ram 字の布字

といった、一連の行法において修されていた。では、『廣大儀軌』において五字嚴身觀は、こういった行法において修されると記されているのであろうか。

『廣大儀軌』の五字嚴身觀を中心とする儀礼を概略すれば、次のように分けられる。

(一) 唵字觀⁴⁷

(二) 五輪觀（五字嚴身觀）⁴⁸

(三) 普通真言・普通印⁴⁹

(四) 五輪器界觀⁵⁰

(五) 普通真言・印（二度目）(三) 普通真言と同一の真言

これら一連の行法は(二)五輪觀（五字嚴身觀）以外、『大日經』「持誦法則品」の行法とは全く異なっている。

まず、(一)唵字觀は、am 字を用いて有為を焼き、無為を成ずる觀法であるが、これはまず『大日經』「具緣品」に次に応度の者を引け。之に灑ぐに淨水を以てし、塗香と華とを授与し、菩提心を發させしめて、諸の如来を憶念せ

しむ。一切皆、當に淨なる仏家に生まれることを得べし。法界生印と及与び法輪印を結びて、金剛有情等を用つて加護を作せ。次に応当に自ら諸仏の三昧耶を結び、三転して淨衣を加すべし。真言の法教の如くにして、用つて其の首に覆え。深く悲念心を起こして、三たび三昧耶を誦せよ。頂に戴くに囉字を以つてし、嚴るに大空点を以つてせよ。周匝して焰鬘を開け。字門より白光を生じ、流出すること満月の如し。現に諸の救世に對して、淨華を散ぜしめ、其の所至の処に隨つて、行人而も尊奉す。漫荼羅の初門の、大龍廂衛の処の、二門の中間に於て、学人を安立し、彼に住し法教に隨つて、衆の事業を作せ。是の如く弟子をして諸過を遠離せしむべし。⁽⁵⁾

とある。この「具緣品」の記事は、弟子を囉字によつて、焼き清める儀礼の場面であるが、対応する『大日経疏』の記事では

弟子の所に至り、先ず囉字を用いて火と爲し、其の身を焚燒して悉く灰と成し已りて、方に四瓶を用いて次第に之を灌げ。灌ぎ已らば、此の灰の中を觀じて轉字門と作せ。其の色純白なり。此れより五字を出生せよ。所謂、阿・鐺・嚩・鉢・欠なり。其の五字輪を持せ。次に暗字を説きて、其の頂上に在け。転じて中胎藏と成すべし。又た此の字より三重の光焰を生ぜよ。一重は遍く咽の上を遶り、所照の及ぶ処に隨いて、諸尊は隨い現れ、即ち第一院の漫荼羅と成る。次の一重の光は遍く心上を遶り、諸尊は隨い現れ、第二重の漫荼羅と成る。次の一重の光は遍く臍の上を遶り、諸尊は隨い現れ、第三重の漫荼羅と成る。爾の時、弟子は都て漫荼羅の身と成る。若し更に深く釈せば、即ち是れ普門法界の身なり。⁽⁶⁾

とあり、五字が出現している。この記事によつて身を清める行法と、五字が結実していることが確認できる。よつて、『廣大儀軌』が依用したのは、『大日経』「具緣品」及び、『大日経疏』のこの場面であると言えよう。

次に、『(二)五輪観(五字嚴身観)』における『大日経』「持誦法則品」との差異を指摘するならば、『廣大儀軌』では「帰命阿」以下、五字それぞれを布置する真言が説かれる。このことは「持誦法則品」には見られず、『要略念誦經』のものと同じであると言える。さらに言うならば、観想する対象が「持誦法則品」のものよりも明確に示されている。

次に、(三)普通真言であるが、この真言は『大日経』「悉地出現品」⁽⁵³⁾「供養儀式品」⁽⁵⁴⁾所説の「虚空藏転明妃」の真言の類似真言であるとされている⁽⁵⁵⁾。

続いて、(四)五輪器界観であるが、「次第に五輪清浄の器世界を成す」⁽⁵⁶⁾として、器世界を建立すべきことが説かれている。これは、日本において五輪器界観と称される修法である。五字厳身観では、*a van ram ham kham* の五字を地輪から風輪へと下から順に配当していたが、器界観では逆に、五字五輪の上下を反転させ上から下へ地・水・火・風・空、*a . van . ram . han . kham*と並べている。なおこの観法は、『大日経疏』において修する所以が示されている。このことから『広大儀軌』における『大日経疏』の影響を見出すことが出来る⁽⁵⁷⁾。

ここでは、『撰大儀軌』・『広大儀軌』の記事を見てきた。『撰大儀軌』には「持誦法則品」を受け継いだ五字厳身観の記事は見られなかった。『広大儀軌』には、「持誦法則品」の五字厳身観を基本としながら、「悉地出現品」の記事を加味した五字厳身観の記述が見られた。しかし、五字厳身観を中心とする儀礼の構造は、「持誦法則品」とは全く異なり、『広大儀軌』独自の五字厳身観を中心とする儀礼であった。

四、まとめ

以上ここまで、『大日経』前六卷、『大日経』「供養法」、『撰大儀軌』・『広大儀軌』の五字厳身観及び五字厳身観を中心とする一連の行法の記事の展開過程を見てきた。

五字厳身観は、『大日経』前六卷において、その裏付となる教理が説かれ、「持誦法則品」において行法としてある程度整えられた。また、「持誦法則品」において五字厳身観は独立した行法ではなく、いくつかの行法と組み合わせた一連の行法であることが確認出来た。

次に、『広大儀軌』の五字厳身観を中心とする一連の行法の記事を確認した。『広大儀軌』所説の一連の行法は、「持誦法則品」のものとは全く異なっているため、『広大儀軌』において独自に構築された行法であると言える。

本稿で得られた知見と、小崎【二〇一六】⁵⁸⁾を鑑みれば、『大日経』第七卷「供養法」の漢訳以降、「胎藏四部儀軌」のうち『廣大儀軌』、そして『廣大儀軌』の記事を、『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』が踏襲し、新たな行法として独自に再整備されていたことが確認できる。これらは全て「善無畏訳」と伝えられているが、それぞれに梵本が存在したとは考え難い。つまりは、こういった展開過程が見られる時点で、少なくとも梵本からの純粋な漢訳ではなく、撰述者によって中国によって撰述されたものが善無畏訳と伝えられる経軌には多かろう。この問題は本稿によって断定できるものではないが、今後とも注視していきたい。

註

(1) このことは、『開元録』に「開元四年丙辰を以て、大いに梵本を齎し、長安に來りて達す。」(『大正藏』五五、五七二上)とあることから明らかである。なお同様のことは、『続古今訳経図紀』(『大正藏』五五、三七二上)中、『貞元録』(『大正藏』五五、八七四下)、『宋高僧伝』(『大正藏』五〇、七一五中)にも記されている。なお、『文苑英華』卷八六〇『全唐文』卷三二九所収の『荊州南泉大雲寺故蘭若和尚碑』には、「既にして無畏三藏、五月十五日を以て京師に至る。」とあり、開元四(七一六)年の五月十五日に長安に至ったことが確認できる。

(2) 『宋高僧伝』に「二十年、西域に還らんことを求むるも、優詔して許さず。」(『大正藏』五〇、七一六上)と帰国の許しを出したものの許されなかったことが記されている。なお、具体的な時期は記されていないが、帰国を願い出たことは、『善無畏行状』にも記されている。(『大正藏』五〇、二九一中)『宋高僧伝』ではこの記事に続けて「二十三年乙亥十月七日、右脅累足し、奄然として化す。享齡九十九、僧臘八十なり。」(『大正藏』五〇、七一六上)とある。これは『善無畏行状』も同様である。

(3) 『望月仏教大辞典』三、三〇〇五頁(世界聖典刊行協会、一九三三)なお、大村西崖『密教発達志』(仏書刊行会図像部、一九一八(一九七二復刻)、附録「経軌章疏一覽」三三(三五頁)では、二十一部二九卷と指摘されている。

(4) 慧琳(七三七〜八二〇)の『一切経音義』には「開元十年壬戌歳、善無畏三藏訳出、仏頂尊勝瑜伽念誦法両卷。」(『大正藏』

五四、五四四上」と記されている。

- (5) この経は菩提金剛による翻訳經典とされながら、梵文原典およびチベット語訳が発見されていない。さらに、中国の経録にも収録されておらず、確かな資料として現れるのが惠運（七九八〜八六九）と宗叡（八〇九〜八八四）による日本への将来の時点である（惠運『惠運律師書目録』（『大正蔵』五五、一〇八九下）、宗叡『録外経等目録』（『大正蔵』五五、一一一二下）、安然『八家秘録』（『大正蔵』五五、一一一五上）。よって、二人の帰朝時にはその存在が確認できるが、インド成立なのか中国成立なのか明確な答えを見出すことはできない。またこの経は、古来より『大日経』『供養法』の同本異訳であるとされてきたが、神林隆浄・那須政隆・小野塚幾澄氏等によって同本異訳説は否定された（神林隆浄『仏書解説大辞典』第七卷、四四九頁、那須政隆『大日経供養法について』（『智山学报』新第九、一九八三）、小野塚幾澄『漢訳の大日経供養法について』（『豊山学报』第五号、一九五九））

- (6) 古来、『要略念誦経』の訳者である菩提金剛とは金剛智（六七二〜七四二）であり、今経が『大日経』『供養法』の同本異訳であると、安然（八四一〜八八九）によって見做されてきた（三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八、二四七頁参照）。しかし、前注記においても確認したように、『要略念誦経』と『大日経』『供養法』とが同本異訳の関係であることは否定されており、また、木村秀明氏によって「当経が金剛智によって漢訳された」と無条件に認めることは難しいと思われる。」と指摘されている（木村秀明『新国訳大蔵経』密教部七『要略念誦経』解題（大蔵出版株式会社、一九九六）。菩提金剛の伝記資料はなく、また、『要略念誦経』の存在を記録している中国の資料もないため、確実に『要略念誦経』について言える点は、今経の成立年代の下限が惠運によって将来された八四七年であることである。さらに、木村氏の最新の研究では「当経（『要略念誦経』）は、恐らく惠運によって請求された時点、即ち847年からあまり過らない時期に、金剛智とは別人の来歴不詳の菩提金剛によって訳されたか、あるいは金剛智に仮託するために、金剛智を容易に連想させる「菩提金剛訳」として、訳出あるいは編纂されたと思われる」と指摘され、また『要略念誦経』は、漢訳された『大日経』第七卷に基づいて作られたものではなく、何らかの原典から漢訳されたものであり、漢訳『大日経』第七卷やPV. (Mahāvairocanaḥisambodhi-sambodhapuṣṭi) とともに、『大日経』供養法を研究する上で重要かつ不可欠な資料である」と評価するものである。」と位置付けられている。（木村秀明『要略念誦経』と『大日経』供養法』『豊山学报』六二、

二〇一九、参照)。なお、今脚注中の○内は筆者が加筆。

- (7) 不可思議に関しては伝記資料等がないため、詳細は不明である。不可思議は『不思議疏』の冒頭に「所謂る小子とは、厥号善無畏三藏和上、即ち是れなり。小僧不可思議多幸にして和上に面諮し、聞く所の法要、分に随いて抄記す。」(『大正蔵』三九、七九〇中)と、唐の開元年間に善無畏から直接教えを聞き、『不思議疏』を撰述したと記している。この記事よって、伝統的に『大日経』第七巻を読む場合『不思議疏』が用いられてきた。なお、前掲の木村【二〇一九】では『不思議の疏』は、供養法の全体像を正確に把握しているとは思えず、本経の理解に役立たないばかりか、かえって障害にさえなつてきたと思われるのである」と、評されている。(木村【二〇一九】八六頁) 参照。

- (8) 拙論【二〇一六】「尊勝仏頂脩瑜伽法軌儀」「尊勝真言持誦法則品」について(『智山学報』七九、二〇一六) 参照。

- (9) 『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』(『大正蔵』一八、九〇五番)・仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密三身仏果三種悉地真言儀軌(『大正蔵』一八、九〇六番)・仏頂尊勝心破地獄転業障出三界秘密陀羅尼(『大正蔵』一八、九〇七番)

- (10) 『撰大儀軌』は「輪婆迦羅奉詔譯、授法弟子一行筆授、比丘寶月譯語。」とある。(『大正蔵』一八、六五上)

- (11) 『大正蔵』一八、一〇八、脚注④に「(或本云玄法寺法全阿闍梨撰) 細註④、(玄法寺法全阿闍梨撰) ②」と、ある。

- (12) 『玄法寺儀軌』の五字嚴身観(『大正蔵』一八、一一〇中下)・青龍寺儀軌「五字嚴身観(『大正蔵』一八、一四六中下)五字嚴身観に関して、『玄法寺儀軌』と『青龍寺儀軌』では、満足句の真言として、『曩莫三滿多沒駄喃阿嚧嚩哈欠』が説かれ、さらに「器世間を安立せよ。空風を最も下に居け。次に火水地を觀ぜよ。是の輪金剛と同じくして、大因陀羅と名づく。光焰の淨金色なり。」と、器界観が説かれる点が特徴的である。なお、川崎一洗(一洋)氏は、両軌所説のこれらの觀法を「五字嚴身観によつて行者の身体に五輪を觀想し、さらに器世界を五輪として觀想することにより、身体と器世界がパラレルなものとして、そのまま大日如來に等しいことを觀ずるためのプロセスである。ここに、行者〓五大・五輪〓大日如來の理論が成立するのである。」と指摘している。川崎一洗(一洋)「経、儀軌、次第」(『現代密教』二五、二〇一四)

- (13) 『大正蔵』五五、一一〇八上

- (14) 『大正蔵』五五、一一一五中

- (15) 『大正蔵』五五、一一〇八上

- (16) 『大正蔵』五五、一一一五中
- (17) 石田尚豊『曼荼羅の研究』〔研究篇〕（東京美術、一九七五）参照。
- (18) 酒井真典『大日經の成立に関する研究』（国書刊行会・一九六二）、松長有慶「入我我入觀の構造」（『日本仏教学会年報』第四〇号・一九七四）、大塚伸夫「『大日經』所説の三種三摩地について」（『豊山教学大会紀要』十八・一九九〇）、川崎前掲論文〔二〇一四〕参照。
- (19) 「我本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過を解脱することを得て、因縁を遠離せり。空は虚空に等し」と知る。（『大正蔵』卷一八、九中）「阿字門、一切諸法は本不生なるが故に。（中略）。法字門、一切諸法は虚空に等しく不可得なるが故に。（中略）。囉字門、一切諸法は一切諸の塵染を離れたるが故に。（中略）。縛字門、一切諸法は語言道斷なるが故に。（中略）訶字門、一切諸法は因不可得なるが故に。」（『大正蔵』一八、一〇中）
- (20) 『大正蔵』一八、三一上
- (21) 『大正蔵』三九、七二七下
- (22) 『大正蔵』一八、三八中下
- (23) 『大正蔵』一八、二〇中二一上
- (24) 木村秀明氏は、『要略念誦經』の位置づけに関して「『要略念誦經』は『大日經』供養法が偈頌としてゐる部分のほとんどを、散文で分かりやすく表現している。また、自ら科文を立てて体系化を図り、さらに細部においても儀軌としての統一性を持たせようと試みた形跡が随所にみられ、多少発展した形態を備えており、その分理解しやすくなっている。また、これらの展開において、漢訳資料からでは知りがたい情報に立脚していると思われる箇所が少なからず存在している。したがって、もし仮に『要略念誦經』が梵本からの翻訳ではなく、中国において成立した文献であったとしても、『大日經』供養法の原典の情報に精通し、その体系および儀礼構造をよく把握したうえで、少なくとも『不思議の疏』や現代の我々よりは正確に理解したうえで、供養法を整備して、『要略念誦經』がつくられていることは確かであると思われる」と、指摘している。（木村秀明「『大日經』供養法の儀礼構造―『要略念誦經』との対照において―」（『仏教学』四七、仏教思想学会、二〇〇五、五一頁）

- (25) 『大正蔵』三九、八〇四下～八〇五中
- (26) 『大正蔵』一八、六一中
- (27) 『大正蔵』三九、八〇四下～八〇五中。なお、「大日三密速得門」の名称は同、八〇三下に見られる。
- (28) 『大正蔵』一八、五二中
- (29) 『大正蔵』一八、六一中
- (30) 『大正蔵』一八、五二中
- (31) 『大正蔵』一八、六一中
- (32) 『大正蔵』一八、五二中～下
- (33) 『大正蔵』一八、六一中～下
- (34) 『大正蔵』一八、五二下
- (35) 『大正蔵』一八、六一下
- (36) 『大正蔵』三九、八〇五中
- (37) 百光遍照王に関しては、既に酒井真典氏によって詳細な研究が報告されている。
- 酒井真典『百光遍照王の解明』（高野山遍照光院歴世全書刊行会、一九六七）、酒井真典「アン（an）字観」・「弘法大師と百光遍照王」（『酒井真典著作集』第一巻、法蔵館、一九八三）参照。
- (38) 『大日経』供養法と『要略念誦経』との記述の相違に関しては、小野塚【一九五九】、那須【一九八三】に詳しい。小野塚氏は『大日経』供養法と『要略念誦経』との記述の相違の傾向として「供養法では（前已依法説）とか、（如前所開示）とか（已於前品中説）として真言を略した形式を認めることができる。つまり供養法で略している真言を念誦経では略していない。すなわち換言すれば、供養法では略した真言を念誦経ではいちいち加えているのではなからうか。」としながらも『大日経』供養法の末尾の文（『大正蔵』一八、五四下～五五上）を引用した上で「供養法の訳者善無畏は重複している真言は略す翻訳方法を取り、『要略』念誦経の訳者は忠実に梵本に従って訳した結果の相違とおみられないこともないが、これとても訳経上の限度というものがあろう。」としている。（小野塚【一九五九】九八頁～九九頁）

- (39) 川崎【二〇一四】参照。
- (40) 拙論【二〇一六】「『尊勝仏頂脩瑜伽軌儀』「尊勝真言持誦法則品」について」(『智山学報』七九、二〇一六) 参照。
- (41) 『大正蔵』一八、八三中
- (42) 『大正蔵』一八、八三下〜八四上
- (43) 『大正蔵』一八、八三下
- (44) 『大正蔵』一八、八六中
- (45) 川崎【二〇一四】は「満足句の真言は、真言中に「勇者(yūa)」の語を含むことから「大勤勇の真言」とも呼ばれる。『大日経』によれば、勇者とは大日如来のことであり、また四魔を降伏して現等覺を果たした瞬間の積尊のことでもあり、両者は同体とされる。よって、この真言と五字嚴身觀が一具として説かれるということは、『撰大儀軌』では、五字嚴身觀が胎藏大日如来を成就するための瑜伽觀法として考えられていることがわかる。」と指摘している。川崎【二〇一四】参照。
- (46) 『大正蔵』一八、九一中〜九三上
- (47) 『大正蔵』一八、九一中〜下
- (48) 『大正蔵』一八、九一下〜九二上
- (49) 『大正蔵』一八、九二上〜中
- (50) 『大正蔵』一八、九二中〜九三上
- (51) 『大正蔵』一八、一一上〜中
- (52) 『大正蔵』三九、六六六中
- (53) 『大正蔵』一八、一九上(八田幸雄『真言事典』(平河出版社、一九八五) 事典番号、四二五)
- (54) 『大正蔵』一八、四八中(八田幸雄『真言事典』 事典番号、四二五)
- (55) 八田幸雄『真言事典』 事典番号、一七一
- (56) 『大正蔵』一八、九二下
- (57) この観法は『大日経疏』「秘密漫荼羅品」³⁷⁾(『大正蔵』三九、七二七下)にとかれ、それを修する理由については、「所以は

何となれば、一切の世界は皆是れ五輪に依持せらるるを以てなり。世界を成ずる時は、先づ空中より風を起す、風の上に火を起こし、水の上に地を起こす、即ち是れ漫荼羅の安立の次第なり。⁽⁵⁷⁾ 壊する時は、地輪先づ壊して、乃至但し空のみ在ること有り、即ち是れ師の自加持の次第なり。」とあることによつて知られる。

(58) 小崎【二〇一六】では、『廣大儀軌』と『尊勝儀軌』・『慈氏儀軌』所説の五字嚴身観を中心とする行法が密接に関係していることを報告している。

キーワード…善無畏、『廣大儀軌』、五字嚴身観